

「七つの詩」の誕生——そのテキストと展覧会

佐谷和彦

今回の第16回オマージュ瀧口修造は「七つの詩」展である。昭和11年(1936)“L'ÉCHANGE SURREALISTE”(山中散生編、ボン書店刊)に瀧口先生が寄稿された「七つの詩」をテーマにこの展覧会は企画された。

七つとは七人のシュルレアリスムの画家を示す。すなわち、サルヴァドル・ダリ、マックス・エルンスト、ルネ・マグリット、ジョアン・ミロ、パブロ・ピカソ、マン・レイそしてイヴ・タンギー。

この展覧会では上記七人の画家について1作家1~3点、計15点の作品を展示した。カタログには展示以外の作品も参考として集録している。これらの作品は極力戦前のものとし、私とかかわりのある作品を中心に選んだ。

作品をお貸しいただいた川村記念美術館、コレクターの皆様、また、「瀧口修造あるいは版の精神」をご寄稿下さった谷川渥さんに御礼申し上げます。

さて、読者のなかにはピカソがシュルレアリスト6人と並んで入っているのを気になさる方もいらっしゃるであろう。そこで、その理由を瀧口修造自身の言葉で示そう。

〈シュルレアリスムとは何か?〉(1937)の末尾で次のように述べている。

「パブロ・ピカソはシュルレアリストとして出発した画家ではないが、シュルレアリ

スムの発酵にもつとも大きな寄与をした芸術家として、また最近この領域への接近によつて、彼の業績は輝いてゐる。今年の巴里万国博の西班牙館に掲げられた大壁画は彼の母国の惨禍を、恐らく過去の如何なる大家にも劣らぬ偉大さをもつて描いてゐる。しかも平素奇癖のやうに視做され勝ちであつた彼の表現、その幻覚のやうに不思議な透視力は巨大な実体として火花を散らしてゐるのである。」

では、「七つの詩」はどのようにして生れたか。最初にこの詩が創られた1936年前後、1930年から1941年にいたる瀧口修造の美術関係の事項(A表)および日本と世界の動向(B表)をご覧いただきたい。

A表は瀧口修造自筆年譜から、B表は私の手元にある歴史年表、美術雑誌やカタログなどから適当に選んで作成した。起点を1930年としたのは、ブルトンの『超現実主義と絵画』を瀧口修造が訳して出版した年であり、末尾を1941年としたのは瀧口が特高により拘留され、しごとが中断された年であることによる。

戦前・戦中の瀧口修造の活動はみすず書房刊『コレクション瀧口修造』第11巻~第13巻(1926~44)に詳しい。1930年代の日本は破滅に向って進行している時代である。したがって瀧口の筆も抑えられた表現が読みとれる。たとえば前掲のピカソに言

瀧口修造の美術関係記録

日本・世界の動き

年	月		月	
1930	6	アンドレ・ブルトン『超現実主義と絵画』(1928) を翻訳、厚生閣書店刊(現代の芸術と批評叢書17)	5	三木清、山田盛太郎など検挙(共産党シンパ事件)
	31		9	柳条湖事件起る、満洲事変勃発。15年戦争起る。
32	12	「巴里東京新興美術展」開催(12月6日ー20日東京府美術館) エルンスト、タンギー、ミロ、ピカビア、アルプの代表作に感動。(56作家、116点展示、大阪・京都、名古屋、金沢、福岡、熊本、大連を巡回)	3 8 10	満洲国樹立 バウハウス解体、ナチの動議によりデッソウ市議会可決 国際連盟脱退
33		前年よりPCL(写真化学研究所)に勤務、スクリプターとして映画制作に協力	1 4	ヒットラー首相に就任 クレー、デュッセルドルフ美術学校教授を解任され、ベルンへ
36	10	「七つの詩」、「アンドレ・ブルトン：文化擁護作家会議に於ける講演」ツアラの詩(翻訳)を“L'ÉCHANGE SURRÉALISTE” 山中散生編、ポン書店刊に掲載	2 11	2.26事件、東京市に戒厳令 日独防共協定調印
37	5	『アルバム・シュルレアリスト』 山中散生共編、“みづゑ”増刊、春鳥会刊	4	ドイツ空軍、ゲルニカを爆撃
	6	日本サロン(西銀座)で“みづゑ”主催「海外超現実主義作品展」を開催(6月10日ー14日、水絵、素描、版画、80点、作品写真・資料350点)	6	ピカソ「ゲルニカ」を制作
	10	詩画集『妖精の距離』阿部芳文画、春鳥会(美術出版社の前身)刊、100部限定	7	蘆溝橋事件起る、日中戦争始まる ミュンヘンで「退廃美術展」開催
38	9	戸坂潤の要請に応え『近代芸術』を三笠書房より刊行	3 4 6	ドイツ、オーストリアを併合 国家総動員法公布 キルヒナー自殺
39	1	『ダリ』アトリエ社刊	5 9	ノモンハン事件起る ドイツ、ポーランド侵攻、第2次世界大戦始まる。タンギー、マッタ、アメリカへ亡命
40	3	『ミロ』アトリエ社刊	9 10	日独伊三国同盟成る 大政翼賛会結成
41	3	特高により逮捕拘留(3月5日ー11月11日)	10 12	ゾルゲ事件 真珠湾攻撃、日米開戦、太平洋戦争始まる。 ブルトン、エルンスト、マッソン、アメリカへ亡命

及した文章の後半を読めば分る。大壁画とは「ゲルニカ」であり、母国の惨禍とは、当時の日本の盟友ドイツ空軍によるゲルニ

カへの爆撃である。具体的な地名、加害者名、その目的などが示されていない。避けている。この事実に時代の圧力が徐々に浸

透してきたことを感ずるのである。

「七つの詩」の成立には次の二つの事件が大きく作用している、と私は思う。第一はブルトンの『超現実主義と絵画』の翻訳であり、第二は「巴里東京新興美術展」で、シュルレアリストたちの代表的な作品を直接見たことである。

『超現実主義と絵画』との出会いは瀧口修造にとって重大な意味を持つ。ブルトンは瀧口の生き方を方向づけた生涯の師である。そのブルトンの主著の翻訳が瀧口にとっての処女出版となった。それはフランスで出版されてからわずか二年後のことであるという事実に驚きを禁じ得ない。「同時代を同時に生きた希有な人物」と宇佐見英治さんは瀧口修造を評されたが、同感である。

と同時に、この翻訳は超現実主義絵画について本邦における初めての本格的な紹介の書である。その意義は大きい。巻末には1910年代、20年代のティピカルな作品、10作家50点の図版が収録されている。モノクロームであるが、関係者にとっては大変な喜びと驚きだったであろう。今みても美しい。作品の選択が確かである。ブルトンが選んだのであるから言うだけ野暮であるが。

もっとも先生はこの戦前の訳書の改訳を考えておられ、人文書院で刊行した『アンドレ・ブルトン集成』の一冊として刊行する予定であったが、残念ながらこの全集（全12巻）は6巻で中断し、実現しなかった。しかし、瀧口修造とブルトンに詳しい巖谷國士さんが近く翻訳出版されると聞いています。もし今年実現すれば66年振りの快挙となる。

ブルトンの『超現実主義と絵画』では次の作家がとり上げられている。ピカソ、ブラック、キリコ、ピカビア、エルンスト、マン・レイ、マッソン、ミロ、タンギー、アルプ。「七つの詩」でその対象となっているダリとマグリットの二人は典型的なシュルレアリストであるが、出発が遅れていたため、この本の出版時には未だ視界に充分入っていなかったのであろうかその名が見えない。

第二に「巴里東京新興美術展」について記す。1932年の瀧口修造自筆年譜には次のように述べられている。「12月に巴里東京新興美術展で、エルンスト、タンギー、ミロ、ピカビア、アルプらの代表作に接し、深い感動をうける」と。

一体この展覧会はどういうものであったのか？私の意識に初めてのぼってくるとは。私の不勉強さを曝露するようなものであるが、直ちに関係者にたずねてみた。その結果、山田諭さんからこの展覧会の目録のコピーをいただき、鶴岡善久さんから『巴里新興絵画選集』（森口多里編、平凡社刊、昭和8年1月）をお借りした。

この二冊を始めて手にとり、この展覧会の内容を知って驚いた。その内容をかいつまんで記すと次のとおりである。

企画者の峰岸義一は1929年パリに行き、アンドレ・サルモンの知遇を得、友人と巴里東京新興美術同盟を結成。委員は東京側峰岸、斎藤五百枝、柳亮の三名、巴里側サルモン、アンドレ・ブルトンの二名（ここにブルトンの名前があるのは私には驚きであった）。展示作品は56作家116点。作家一人につき1~4点の出品。1930~32年を中心とする近作。シュルレアリストの作品

のほかレジエ、シャガール、マルクーシス、ヴィヨン、オザンファン、ザッキンなども含まれている。東京が立ち上りで、大阪、京都、名古屋、金沢、福岡、熊本、そして中国大陸の大連まで巡回している。まず、戦前における空前絶後のフランス前衛絵画展であった。

目録には超現実派として次の作家が示されている。マックス・エルнст (2)、イヴ・タンギー (3)、マン・レイ (2)、ジョルヂオ・ディ・キリコ (1)、アルベル・サヴィニオ (2)、ジュアン・ミロ (2)、パブロ・ピカソ (3)、カール・セリグマン (1)、アンドレ・マツソン (4)、フランシス・ピカビア (2)、ポール・ヴェズレイ (2)、ピエール・ロワ (2)、ハンス・アルプ (1)、ユージエヌ・ケルマデック (2)、ガストン・ルーア・ルー (2) 計 15 名 (31 点)。カッコ内は出品点数。

カタログ、画集の図版から推測すると、タンギー、エルнст、ミロ、マツソン、キリコ、ピカビアなどは見ごたえのある作品であったことが分る。シュルレアリスムの作品に優品が多いのはブルトンが委員であったためであろうか。ピカソが超現実派のグループに入っていること、ダリ、マグリットが出品されていない点も興味深い。

なお、この展覧会についてはカタログ「日本のシュルレアリスム 1925~45」(山田諭編、名古屋市美術館、1990年10月)に掲載されている“巴里東京新興美術展”の項に詳しいのでご参考までに申添える。

最後に 1941 年から'45 年の空白期の瀧口修造の姿を自作年譜から汲みとて結びとしたい。

方寸の怒り見せたり小搖れ蓑虫

この俳句は特高により取調べ拘留中の句で、当時の瀧口修造の心境を示すものである。ここにはもって行き場のない憤怒の思いが、身動きできない狭い空間のなかで揺れ動いている。その心が凝縮していて、私の胸を打つ。

'45 年 5 月 25 日、高円寺の自宅が全焼。シュルレアリスム関係の著書、資料、ブルトンの書簡等が灰燼に帰した。恐らく、今回展示のダリの『処女懐胎』、『見える女』の版画も焰に包まれて消え失せたであろう。しばらくは茫然自失。と記されている。

8 月 15 日敗戦を迎える、「しごれるような解放感を味わい、金沢市内をあてもなく歩きまわるが、足も地につかぬ思い」とある。

黒揚羽抜けて涼しき竹の奥

1946 年から数年間、日米通信社で海外から発信される文化ニュースを翻訳し紹介するしごとにたずさわりながら敗戦後の混沌のなかから勃興してきたアンデパンダン、タケミヤ画廊、実験工房へと、瀧口修造の活動が本格的に始まる。

(1996 年 5 月 28 日)